

2011年3月11日東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）は、正しく日本の災害史に残る大震災となった。テレビに映し出された映像を見ながら、こんなことが本当に被災地では起きているのか、目を疑うような光景が繰り広げられていた。思えば、2004年12月26日に発生したインド洋津波地震の際にインドネシアのスマトラ島北部のバンダアチエの市街地を津波の濁流が襲い、住民が逃げ惑う映像が地震後何日か過ぎてから全世界に流れ、津波の恐ろしさを捉えた世界初の貴重な映像として紹介された。この映像を見た時も、市街地を川の濁流のように、しかも四方八方に押し寄せる海水流に押し流される建物や自動車、そして逃げ惑う人々が映し出されていて、これが大津波なのだという認識をもったことを覚えている。これと同じことがまさか日本で、東北地方で起きるとは思いも寄らなかったというのが実感でした。

「防災塾・だるま」が設立されて8年目になりますが。常に「防災情報の共有化と人的ネットワークの構築」ということを謳い文句に活動を続けておりますし、会員の皆さんにも定着して、その目線で定例会や講座、ワークショップなどを開催してきました。その際に、いつも災害に対する備え、すなわち防災・減災活動を実施するうえで、災害をイメージする、災害の様相を認識（災害として襲いかかってくる敵の姿を知ること）することが大切であるということも共通の理解として根付いています。

しかしながら、災害をイメージするということは、テレビで被災状況を見る、報告書や報告会で写真や説明を見聞きするだけでは十分ではないことも皆さんの共通の認識であったと思います。従って近年、被害を伴うような地震災害の被災地へ行き、被災の現場を実際に体験する活動をしたいとの意見も多くあったと思います。実際には、2004年の新潟県中越地震の際には3年半後の2008年春に中越防災安全機構の方々の協力を得て被災地をめぐることが実現しました。このことで参加された多くの方が、多くのことを学び取ったと思います。

被災地に入るということは、被災後の時期の問題（宿泊、飲食料の調達）、交通手段の問題、余震の発生や痛んだ建物、斜面の崩壊などの危険性が伴ったり、何よりも被災された方達への気遣いなどいろいろな観点から難しい点が多く、なかなか実現させることができなかった経緯がありました。今回、皆さんの意志で被災後約1年を経て実現できたことは、防災・減災活動を行っていくうえで、大変大きな活動になったものと思います。

この報告書は、このような経緯で実現した東日本大震災の被災地である岩手県から宮城県に至る海岸線の地域を2泊3日を掛けてめぐって来た参加者の方々が、実際に見聞きして学んだこと、感じたことの内容を記憶の一旦としてまとめた貴重なものです。

「百聞は一見にしかず」といわれるように、被災地を実体験することにより、多くのことを学び、災害の規模、スケール、感性などによる災害のイメージは大きく変わったのではないかと思いますし、そのことを思い出し、後世に伝え残すことが、被災された地域や被災者の方々に対する細やかなお返しと次の災害に対する備えに大きく繋がるものと思います。改めて、被災者の方々のご冥福をお祈りいたします。

《参加者リスト》

～ 女性 5名、男性 17名 合計 22名（うち 防災塾・だるま会員 20名）～

	氏名（敬称略）		防災塾・だるま
1	池田 邦昭	横浜市緑区	会員
2	伊東 幸保	横浜市神奈川区	会員
3	上原 美都男	西東京市	会員
4	荻本 孝久	神奈川大学	塾長
5	荻本 俊樹	横浜市港北区	（一般参加）
6	小原 茂	横浜市磯子区	会員
7	添田 睦子	平塚市	会員
8	高松 清美	横浜市南区	会員
9	鶴谷 賢昭	横浜市港南区	会員
10	鶴谷 ^{みずよ} 瑞代	横浜市港南区	（一般参加）
11	中島 光明	横浜市緑区	会員
12	山口 昭	横浜市磯子区	会員
13	山口 章	横浜市緑区	会員
14	山田 美智子	平塚市	会員
15	長沼 重雄	横浜市栄区	会員
16	片山 晋	横浜市磯子区	会員
17	成松 洋	横浜市都筑区	会員
18	田中 晃	横浜市緑区	会員
19	大西 正男	横浜市神奈川区	会員
20	佐々木 義雄	横浜市緑区	会員
21	小早川 津恵乃	横浜市南区	会員
22	ラヒミアン マホムツド	大分県別府市	会員

（会員番号順）

1. ふるさとが被災

横浜市緑区在住の佐々木さんの実家（岩手県山田町）は、3.11の津波で被害を受けました。実家は大津波で床上浸水したものの、石垣と植栽に守られ、流出はまぬがれました。

2. 防潮堤はなぜこわれた？

佐々木さんは、被災した防潮堤（山田町）の想像を絶する被害に、ぜひ専門家に見てもらいたいとの思いでした。区民会議（現：まちづくりネットワーク緑）の仲間であった池田さんが神奈川大学の荏本教授を紹介しました。

3. 被災地調査

4月早々、被災地山田町を神奈川大学荏本先生・佐藤先生達専門家の方々が2台の車で被災地に入りました。佐々木さんは被災地を案内すると共に、被災した実家の一部を宿泊として提供いただきました。

4. 被災地へ行こう！

「防災塾・だるま」の会員仲間で被災地訪問を検討していましたが、昨年12月の定例会（談義の会）で日程で調整し、3月14日（水）～16日（金）に決定しました。

5. 皆さんの協力

- （1）山田町：佐々木さん……………佐々木さんの出身地ということもあり、宿泊および現地勉強会（交流会）の人選をお願いしました。
- （2）気仙沼市：山口昭さん……………当初の計画は全くの白紙でしたが、杉田劇場（磯子区民文化センター）が気仙沼と交流があったため、磯子区の山口（昭）さんに交流会の調整をお願いしました。
- （3）佐々木さん・山口昭さんに感謝…今回、現地との交流会実現には並々ならぬ苦労があったと思います。ありがとうございました。
- （4）岩手県復興局：高松さん……………高松さんの人脈から快く復興の話を聞くことができました。

6. 報告

4月・5月の防災まちづくり談義の会で参加者報告をする運びとなりました。被災者の気持ちを多くの人に伝えたいとの思いでいっぱいです。

7. 記録

参加者レポート及び写真その他の資料を記録し、多くの人々に伝えられればと思っています。

8. 継続

今回の交流を機会に、山田町や気仙沼市との交流が継続し発展することが大切だと思います。また、今回参加されなかった会員の被災地交流活動を紹介することも今後の課題です。

III. 「被災地をめぐる」企画概要

1. 参加者 女性 5名、男性 17名 合計 22名 (うち 防災塾・だるま会員 20名)

(参加者氏名: 2ページ《参加者リスト》参照)

2. スケジュール・行程

前泊 3月13日(火) 岩手県庁復興局訪問

第1日目 3月14日(水) 「岩手」

普代～田野畑～田老～宮古～山田町

(夜: 山田町交流会 場所: 居酒屋「初音」)

第2日目 3月15日(木) 「岩手～宮城」

山田町～大槌～釜石～大船渡～陸前高田～気仙沼

(夜: 気仙沼交流会 場所: 「紫会館」)

第3日目 3月16日(金) 「宮城」

気仙沼～南三陸町～松島～名取 (仙台駅にて解散)

3. 交流会

山田町交流会

山田町商工会会長

阿部幸栄氏

山田町技監

榎田雅士氏

気仙沼交流会

南町1区自治会長・紫会館避難所運営委員長

千葉秀宣氏

南町柏崎青年会会長

坂本正人氏

気仙沼復興商店街理事長

村上力男氏

気仙沼ほてい株式会社

石川晃氏

4. 役割分担

幹事: 岩手県: 佐々木さん 宮城県: 山口(昭)さん 岩手県庁: 高松さん

活動報告: 第1日目: 田中(晃)さん 第2日目: 小原さん 第3日目: 鶴谷さん

交流会報告: 山田町交流会: 片山さん 気仙沼交流会: 添田さん

交流会司会: 山田町交流会: 高松さん 気仙沼交流会: 山田(美)さん



《岩手県庁復興局訪問》

3月13日(火)

復興局まちづくり再生課

伊藤勇喜氏

熊谷克行氏

総務部総合防災室

工藤直樹氏

中田健太氏

(訪問者: 高松・池田・田中晃)

【宿泊先】 山田町: 嶋田鉦泉

気仙沼: 金港館・大鍋屋

【移動】: マルヨタクシー (山田町)

(レンタルバス) 奥州交通 (陸前高田)

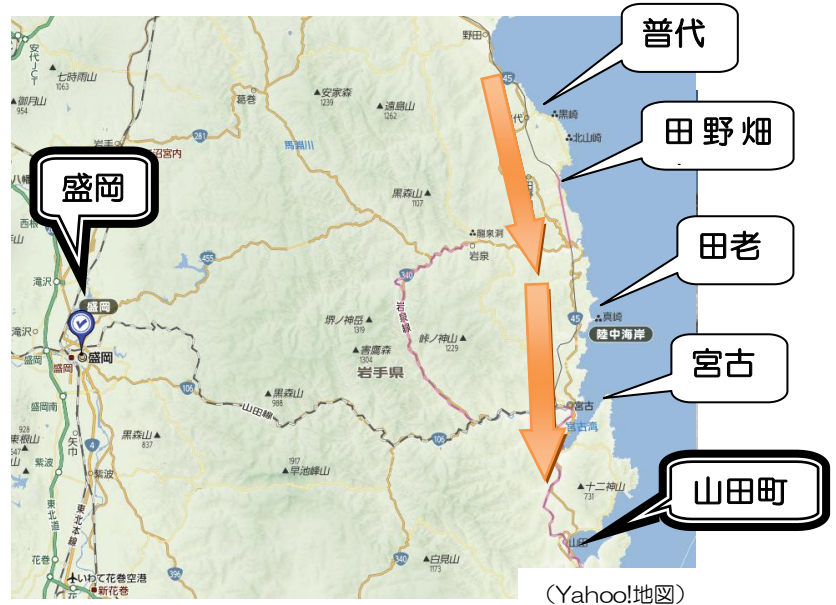
IV. 活動報告

第1日目 3月14日(水)「岩手」： 普代～田野畑～田老～宮古～山田町

報告者：田中晃

先発組(前泊組、夜行バス組)は宮古バスターミナルで合流して北上、普代・田野畑方面から始まり、南下して昼頃に宮古に戻って当日新幹線組とも合流した。

午後からは22名全員で、3月の早春とは言えまだまだ残雪の残る田老の防潮堤とまちの被災状況を視察し、夕刻山田町に到着し、復興物産店で買い物のあと交流会会場へ。終了後、嶋田鉱泉で宿泊。



1. 普代村・田野畑村

(普代村) 最初に立ち寄った調査最北端の普代村の漁港。津波は漁港の裏山まで駆け上っていた。海産物の作業所と思われる建物が新しく建てられていた。



(普代水門)

左： 津波はこの高さ15.5メートルの水門を超えたが、被害は最小限に食い止められた。建設当時の村長はこの偉業が評価されず、寂しく亡くなったと聞く。

下： 写真には折れた木の跡がある。村入り口の鉄道の下にさらに水門があり、二重の防御体制になっていた。

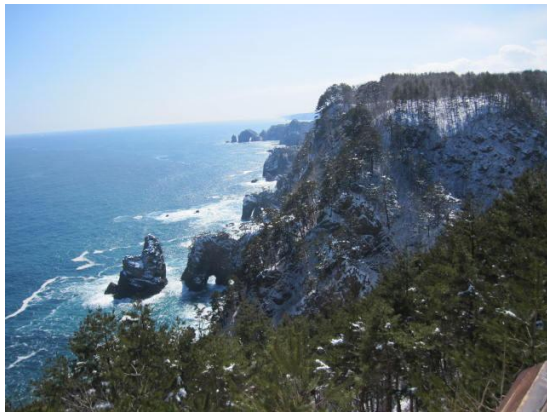




(田野畑村)

左：三陸鉄道が破壊され、手つかずの状態だった。

下：田野畑駅そばの平井賀川水門の機械室。
その先は被害を受けた村の中心地。



(田野畑村)

景勝の地「北山崎」陸中海岸国立公園展望台からの眺めが素晴らしい。

この海も津波で汚れたが、今ではきれいな青さが復活していた。

2. 宮古市は岩手県最大の被害地



(宮古市)

市街地のビル1階の被害状況。

宮古市は、市街や田老地区等海岸沿いの全域で被災した。

防潮堤を超える黒い波と漁船の漂流映像が生々しく思い出される。

3. 宮古市田老

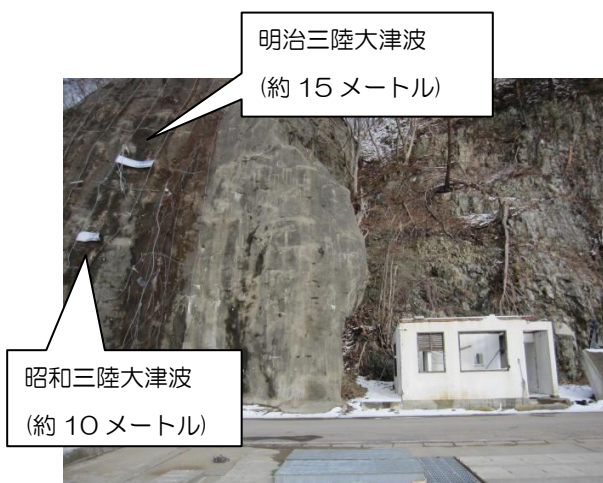


中心部が徹底的に破壊されたが、高台の住宅は被害が出ていない。天国と地獄を見ているようだった。
津波速度は毎秒10メートルとの報道。



(「津波太郎」日本一の防潮堤)

左：水門の両側の堤防は破壊されていた。
コンクリートの中は砂で、旧型タイプか。
下：海面からの高さ10メートルの防潮堤を
約19メートルの津波が乗り越え、
市街地を襲った。



(田老の津波水位表示)

過去の津波の高さが表示されていた。

明治三陸大津波：約15メートル

明治29年(1896) 6月15日午後7時32分 M8.5
(死者不明 1,859人)

昭和三陸大地震：約10メートル

昭和8年(1933) 3月3日午前2時30分 M8.1
(死者不明 911人)

…決して千年に一度ではない…

4. 山田町の仮設店舗



(三陸美味 木村商店の仮設商店)

「いか徳利」が売り、作業場兼仮店舗でふるまわれた「いかの白子汁」がおいしかった。

商品の品数はまだ少なかった。



《第1日目の感想》

- ◆ 普代水門は今回のような大津波を予測した水門で、村の人命が助かった。ハードによる成功例と言える。鉄道下の道路にも水門があった。防災(人命)面からと経済効果の意見を論議する必要がある。村長と行政は人命を取ったのだろう。現実と未来を見据えた行動力に感動した。
- ◆ 宮古市田老をじっくり見た甲斐はあった。
万里の長城として誇った堤防がもろくも壊れている。堤防の基礎はただ置かれただけのものだった。堤防の中は石やコンクリートではなく砂だった。津波の恐ろしさを実感した。ガレキが撤去され、家屋の土台だけが残ри、殺風景な風景だった。ビルの鉄骨は強いのがわかった。
- ◆ 3月は雪が多いようで、被災者はさぞ寒かったろう。
- ◆ 各地には、「津波注意・津波浸水想定区域」の標示があった。
参考になる。
- ◆ 山田町の花産物加工工場の仮店舗を訪れたが、まだ品薄だった。山田町全体では需要に追いつけず、大々的に宣伝するまでには至っていないようだ。
地域振興に手を差し伸べる東北応援を具体化できないか。



第2日目 3月15日(木)「岩手～宮城」：山田町～大槌～釜石～大船渡
～陸前高田～気仙沼 報告者：小原 茂

8:30「嶋田鉱泉」をバスで出発。

「嶋田鉱泉」のある豊間根地区は、山田町でも津波が届かない高台にあった。

浦辺さん(防災塾・だるま会員で被災者)の自宅跡地付近を通過、かなり防潮堤に近いところだった。

山田町中心部の被災状況を視察した後、山田湾と船越湾に挟まれた船越、そして南下して大槌、「釜石の奇跡」現地を訪問し、釜石で昼食、元気回復。

午後は、大船渡から陸前高田へ。陽が傾き気温も下がる中「奇跡の一本松」を見上げる。夕刻気仙沼市内へ入り、気仙沼ほてい社に立ち寄ってから宿で荷を卸す。夜は「紫会館」で交流会、充実した1日を終えた。

1. 山田町・織笠・船越



(Yahoo!地図)



8:45 (山田町中心部へ)

震災前は商店が立ち並んでいた目抜き通りと町の中心部は深刻な被害を受けていた。

バスから見た大杉神社では、鳥居を残し、ほとんど跡形なし。神輿も流された。

9:00 (震災記念碑と「御蔵の湯」)



高台にある震災記念碑「鎮魂の鐘」を訪れた。

横には復興資金でつくられた「御蔵の湯」。無料で利用できる。



左：大津波が来襲した「3時27分」を指したまま止まったJR陸中山田駅大時計もモニュメントとして展示されていた。



9:25 (山田町八幡神社)

山田町役場の隣。

昭和三陸津波(昭和8年)の記念碑があり:「ここより下に家を建てるな」とも書いてあった。

9:50 (織笠から船越へ)

織笠:山田湾入口が真正面に見える地域。壊滅的被害を受けていた。

船越:北の山田湾と南の船越湾に挟まれた地域に、南北ふたつの湾から防潮堤を乗り越えて大津波が襲った(津波柱が立った場所)。



10:00 (船越)

町のガレキが集められた広大なところ。その光景に、啞然・茫然。

下:津波は水門を破壊して船越を襲った。



(田の浜の船越魚市場跡)

津波が3階の天井まで達したビルが残っていたが、周辺はカラッポ。

津波の破壊力を見せつけられた。



10:10 (船越小学校跡地)
 展望良好、海拔約12メートル
 (津波は15～16メートル)
 校舎は完全撤去されて跡形もなく更地。

11:00 (道の駅「ふれあいパーク山田」) ～ 休憩と買い物 ～

2. 吉里吉里^{きりきり}～大槌^{うのすまい}～鵜住居^{うのすまい}・釜石

11:15 (吉里吉里^{きりきり}) 吉里吉里共和国を通過。山田町よりはガレキ撤去が遅れていた。



11:20 (大槌町)
 町の幹部全員が亡くなったり不明となった
 旧大槌町役場前。
 町全体が被災、復旧の遅れあり。

11:30 (鵜住居^{うのすまい}) 釜石市で最大の被災地。2011年7月に山口(昭)さん・小原さんがボランティア活動に参加した。住めなくなった住居とガレキはすっかり片づけられていた。



11:50 (釜石の奇跡)
 左奥: 鵜住居^{うのすまい}小学校 右: 釜石東中学校
 子供たちの避難した距離は長かった。
 教育の大切さを痛感。
 現在も周辺はガレキの山。

下: 釜石東中学校にて(背景にはガレキの山)



13:00（釜石市内） 釜石も大きな被害を被った。バスで通過した地域の被害は他市町村に比較すると少ないか。

～ 昼食 ～ …名物の魚定食にありつけずラーメンとなった人は残念。

4. 吉浜～大船渡～陸前高田～気仙沼

13:30（吉浜） バスから高台移転して津波を免れた町を見る。



15:30（陸前高田:奇跡の一本松）

町は広大な平地に！！

一本松は枯れが進んでいた。

皆の期待を集めたが生き残るのは難しそう。

この松の子供たちが命をつないで元気に育ってくれることを祈る。



16:30（気仙沼港から800メートル）

陸に上がった「第18共徳丸」（総トン数：約330トン）の前で記念撮影。

想像を超える津波の力に絶句。

記念に残す価値あり。

17:00 宿に荷を卸す。直ちに気仙沼交流会へ。

交流会では、被災状況説明と質疑応答、

そして歓談。 有意義な夜だった。

《第2日目の感想》

◆山田町八幡神社の津波記念碑に「ここより下に家を建てるな」と。記念碑のすぐ下まで津波が来た。教訓を伝えていくことの大切さを見た。

◆昨年山口（昭）さん・小原さんがボランティア活動で訪問した大船渡・陸前高田（4月）と釜石（7月）のガレキの撤去は、思っていたよりは進んでいた。

◆高台移転が町を津波から救った吉浜をバスから臨んだ。高台移転は、復興を考える上で大きなテーマであることは間違いない。

◆被災地は復旧復興に向けて大変な苦勞をしている。復興の状況を自分の頭と身体で感じ取りながら見守り続け、できる限りの物心両面の支援・協力をしなければならないと痛感した。

気仙沼出発前に、気仙沼港付近と
気仙沼復興商店街・南町紫市場を
視察。その後、45号線を南下し、
南三陸町・志津川地区で途中下車
し、現地視察。更に南下し、松島・
五大寺見学して、松島海岸駅にて
往本教授一行とお別れ。
塩釜水産物仲卸市場にて買い物後、
マリゲート塩釜にて昼食休憩。
昼食後、名取市・仙台空港をバスから
視察し、閑上湊神社へ。
その後、仙台東部有料道路を經由
して仙台駅、そして、現地解散！！



(Yahoo!地図)

1. 気仙沼港



21.9メートルの津波が襲った気仙沼港の桟橋は
破壊され、岸壁は地盤沈下していた。

満潮時には一部の市街地は今でも浸水する
ところがあるとのこと。

左に見えている駐車場の2階まで津波が襲った。

2. 気仙沼復興商店街「南町紫市場」



前夜交流を持った南町の皆さん達が、国の仮設
施設整備事業の支援を受けて立ち上げた。昨年
5月に検討開始し、12月24日にオープンした50
軒ほどの市場。(商店街の仲間ですでに70軒も
の人たちは商売を断念したとのこと)

この地区は仮設施設は建設可能であるが、本格
的な建物は建築不可で復興の目途がたって
いない。

3. 南三陸町・防災対策庁舎



3月11日大きな揺れの後、津波の来襲と高台への避難を呼びかけ続け、津波に押し流された防災放送担当の職員・遠藤未希さんがいたのはこの防災対策庁舎の2階だった。

私達は未希さんの呼びかける声をTVで何度も繰り返し聞いたことがあると思うが、彼女の最後の声が震えていたように聞こえた。

大変怖い目にあいながらも最後まで責任を全うした彼女のご冥福を祈りたい。

4. 公立志津川病院



南三陸町は19.3メートルもの津波に襲われ、志津川地区はほぼ全域が海のようになり、志津川病院の屋上付近まで海水がきた。

2階には漁船が今も乗り上げており、津波の恐ろしさが一目瞭然。

5. 松島町=松島港



2メートルの津波が海岸を襲い、雄島に架かる渡月橋は流失するなど、沿岸部の観光・商業施設を中心に建物の被害が発生した。

しかし、大小260余りの島々が自然の防波堤になって津波がかなり小さくなり、被害が最小限に抑えられたとのことであった。

6. 名取市口閑上地区



名取川河口の閑上地区には漁業施設や住宅が集まり約2100世帯が暮らしていたが、ほとんどが5メートル以上の津波で被災した。まだこの地区では漁船の残骸や海水が引かずにそのままになっていた。

名取市では911人が犠牲になり、行方不明者がいまだに57名いる。

7. 閑上^{ゆりあげみなと}神社・富主姫^{とみぬしひめ}神社



昭和8年3月3日に発生した昭和三陸地震後に閑上^{ゆりあげ}町長が建てた石碑に「地震があったら津波に用心」と記された碑文が残っていた。石碑は今回の地震と津波で神社の下に倒れていた。

《今回の被災地訪問に参加しての感想》

- ◆ 今回、岩手県および宮城県の沿岸の被災地を訪問し、津波に激しくえぐられた海岸線、破壊された線路や駅、道路、学校などの各施設、そして土台しか残らない家屋を目のあたりにし、あらためて自然災害の破壊力のすごさ、非常さを見せ付けられた。
- ◆ 災害から1年が過ぎたにもかかわらず、復旧・復興に向けた取り組みの遅さがこんなにひどいものとは想像もしていなかった。特にガレキの処理の遅さには唖然とするだけ。瓦礫の処理に各自治体に協力を要請しているにもかかわらず、都道府県で協力を表明しているところが非常に少ないことに、本当に日本人には絆があるのかとあらためて考えさせられた。
- ◆ 各地に、地震が発生すれば高台への避難を促す碑文が記された石碑がたくさんあった。あらためて先人の教訓を引き継ぐことの大切さを知る機会になった。今後とも被災された方々が一日も早く元気を取り戻して一步一步前進し元の姿に戻るよう、微力ながら、ながいながい取り組みの支援を続けて行きたいと思った。

V. 交流会報告

山田町交流会 3月14日(水) 17:30~21:00 場所：居酒屋「初音」
報告者：片山 晋

3月14日(水)17時過ぎに山田町居酒屋「初音」に到着。



早速、国土交通省から出向の榎田雅士技監による「山田町復興」に関する計画と経過報告の講演を聞いた。資料「山田町復興計画策定」を用いて説明され、地元で陣頭指揮をとり復興ビジョンとその計画策定がいち早く進捗している様子がうかがえた。

その説明が終盤にさしかかった18時09分頃に三陸沖を震源とするM6.8の地震があった。

しばらく様子をうかがいながら続けていたが、気象庁の津波注意報をうけて、県総合防災室から避難勧告が出され、町の防災無線拡声器によって、また地元のFMラジオによっても津波注意報に基づく避難勧告が出されたのを確認したので、受講を中断し避難することにした。



避難先までは暗くて段差もある鉄道線路跡地の道だったが、さすが非常時の明かりを携帯している人が多く、無事に山田町役場・中央コミュニティーセンターの避難所に到着した。



しばらく待機した後、2階の広間で、阿部幸栄商工会会長と榎田雅士技監のレクチャーの続きを受けた。



19時40分頃に避難勧告が解除されたので、会場の「初音」へ戻り、飲食をしながら交流会を行った。
終了後21時過ぎに宿泊所の嶋田鉱泉に着いた。

榎田、阿部両氏による講演の項目・内容は以下の通り

1. 山田町復興計画策定（山田町技監 榎田雅士氏）

山田町の概要と被害状況および比較

- ・山田町の位置 ・山田湾の概況 ・津波の歴史 ・津波浸水エリアの比較
- ・東日本大震災津波による浸水エリアと火災エリア
- ・東日本大震災津波による被害の状況
- ・東日本大震災による被害の状況 ・インフラの被害状況と復旧状況
- ・復旧状況・復興に向けた動き ・住民アンケート結果 ・復興計画の概要
- ・基本理念など
- ・復興まちづくりの方向性「町の将来像」「防災施設」「土地利用、交通施設」
- ・分野別復興計画の概要 ・地区別復興イメージ「山田地区」「船越・田の浜地区」
- ・山田町復興計画からの防災・減災のヒント

上記「復興計画からの防災・減災のヒント」の関しては、首都圏での備えにも参考になる次の項目についての話を聞いた。

- ・広域的な幹線道路の確保 ・防災拠点の整備 ・分断要素の解消
- ・弱者対策 ・建て詰まりの解消

2. 山田町商工会商工業復興ビジョン

(山田町商工会会長 阿部幸栄氏 場所:山田町役場・中央コミュニティーセンター)

災害前の幹線道路に沿った商業地区でなく、JRの駅前周辺を2～5メートル嵩上げて線状から面状にしたコンパクトシティー商業ゾーンとするビジョンについて伺った。

山田町は水産業なくして復興はない。新しい町は駅の周辺にし、津波に対しても安全であること、歩ける範囲で用が足せること、町並みは統一的にして海から見て良い景観であること等々、ある面では強制的規制も必要である。皆の一致団結が不可欠である。

「推進するにあたりお金がかかるが規制多くてお金が回らない。このまま時間が経過すると多くの人が破綻してしまう。今一番必要なのは使えるお金です。」と生々しくも切実な声。ご苦労の様子が身にしみて感じられた。全く同感であり、何とかしたいと云う気持ちにさせられた。

(講演配布資料)

1. 山田町復興計画策定
2. 山田町商工会商工業復興ビジョン(概要)
3. 仮設コミュニティ拠点構想図

3月15日(木)夕刻、気仙沼市南町の「紫会館」を訪ねた。

「紫会館」は町の自治会館を兼ねている。東日本大震災被災時には、約140名(うち南町住民:約120名)がここに避難して生活を共にしたという。ここでは次の方々に話を伺うことができた。

【 隣組・コミュニティの力で 】



左: 千葉秀宣氏

(南町1区自治会長・紫会館避難所運営委員会会長)

右: 坂本正人氏

(南町柏崎青年会会長・紫神社総代)

《毎月 避難訓練を実施していた》

南町は5地区・約500世帯で構成され、二世帯三世帯同居で暮らしている家庭が多い。

避難訓練は、毎月紫神社境内で行われており、お祭りやドンド焼き等 地域のイベントも、この境内で行われてきた。

《津波被害:速やかな安否確認》



南町のうち津波被害を免れたのは高台に位置する4区・5区のみ。1~3区では家屋等約90%が被害を被った。

亡くなった者6名、行方不明者ゼロ。

3日目には安否確認を終え、地区名簿も完成した。南町の名簿作成は気仙沼でも最も早かった。

《避難所運営：皆で協力し合うことが基本》

- ◆津波避難勧告が出た際、南町の住民は皆、紫神社・紫会館(自治会館)を目指して逃げた。ここは一時避難所ではあったが認定避難所ではなかったため、当初、食料をはじめ物資は届かなかった。そこで、自治会として行政に交渉、認定避難所として認められ、物資も届くようになった。
- ◆全員が着の身着のままでの避難だった。気仙沼小学校(災害避難所)に毛布をもらいに行き、使えるストーブ2台を入れた暖かい部屋は女性と高齢者に提供した。自治会に入っていない人も避難してくる人は全て受け入れた。
- ◆ニュース等で見られる区分けパネル等は使わなかったが、日頃から隣近所顔の見える関係があり、特に問題も起こることはなかった。避難所運営は避難した者の手で皆で行なった。
- ◆行動は5人単位を基本として、自警団も組織した。認定避難所として物資の配給を受けた。1～3区の自治会長全員が「紫会館」に避難し、スムーズな運営に努めた。
- ◆南町は自治会組織もしっかりしており、その下に青年会がある。避難所生活ではこの青年会の活躍に負うところが大きかった。
- ◆当初最も大変だったのは避難者全員が食べること。6升炊ける釜もあったので皆で協力し、商店からは120キロの米、冷蔵庫の魚など様々な提供があった。

運営は皆で協力し合うことが基本。8月4日に避難所を閉鎖するまで続いた。

動こうとしない人には、「はい、散歩に行きましょう」などと声をかけ、持てる範囲の木片を燃料として持ってきてもらう。酒を入手し皆で飲み、語り合った。

【 気仙沼のものを売る 】

気仙沼ほてい株式会社 石川晃氏



- ◆一年前、会社が被災した時はもう操業は不可能と思われた。しかし、ほていフーズ本社の協力をもらいながらなんとか復興してきた。現在の製造ラインは以前の半分、製造状況は6分の1。
- ◆倉庫もないので、作ってすぐに岩手に借りた倉庫に運び、そこから配達している。今後の展望・課題としては、震災前の取引先を確実に取り戻すということが前提。ふかひれの水揚げは震災前の半分になってしまったが、柱である「ふかひれスープ」をメインに「気仙沼のものを売る」という心意気で、『気仙沼ほてい』の名を残していきたい。

【 この街で生まれ育ってこの街が好きだから、またやるんだ 】



中央:気仙沼復興商店街理事長 村上力男氏

津波後、被災した町の様子を見て全員が「もうダメだ…出て行くしかない」と思ったが…

夜、会議をしながら「コロッケでも揚げてみようか」という話が出、コロッケと下着の販売が始まった。これが気仙沼復興商店街を立ち上げる契機となって、復興商店街立ち上げに向けて検討が始まり、12月24日のオープンにこぎつけた。



【 コミュニケーションが復興の力になった 】

毎週 皆で集まって相談した。

「今日は何を相談するんだ」「何もなくても集まれ」「とにかく集まるんだ」若い者が言った。

「この街で生まれ育ってこの街が好きだからまたやるんだ …これは、やらなきゃ！」

こうしてチームが出来あがった。

「我々の想いを形にしたものが欲しい」「その前にちゃんとした青写真を」… 商店・子どもたちの遊び場・文化を守る・繁盛・外から人を呼ぶ…皆で話し合ったことを元に、青年部は、お年寄りに必要な薬を尋ねて病院に行く等々…。コミュニケーションを取り、青年会・自治会は、PTAや子どもやお年寄りに援助するなどの努力を重ね、さらなる復興を目指している。



気仙沼の新鮮な刺身とおいしい「ふかひれスープ」をいただきながらの歓談。

被災してなお前向きに歩む気仙沼の皆さんの姿に、こちらが勇気づけられました。

VI. 岩手県庁復興局訪問レポート「岩手県の被害とまちづくりの再構築」

報告者：田中晃



3月13日(火)

高松さんの紹介で訪問が実現。

訪問先：

岩手県 復興局まちづくり再生課

主任主査 伊藤勇喜氏

主任主査 熊谷克行氏

総務部総合防災室

室付 工藤直樹氏

主事 中田健太氏

(訪問者：高松・池田・田中晃)

(復旧・復興でご多忙の中、私達の訪問に應對いただいた岩手県庁の皆さまに感謝します。)

1. 岩手県の被害概要

- ◇ 震源：三陸沖 深さ 24キロメートル M9.0
- ◇ 津波の高さ：地震後 約30分後 宮古 8.5メートル以上 大船渡8.0メートル以上
- ◇ 被害：死亡者数 4,671名 行方不明者数 1,249名 計 5,920名
 - 家屋被害：24,746 産業被害：8,178億円 土木施設：2,573億円
 - ライフライン被害：停電 76万戸(5/28復旧) ガス 9,400戸(4/26復旧)
 - 断水 約18万戸(7/12復旧) 電話不通 6万6千回線(4/17復旧)
 - 避難者ピーク：3/13 54,429人 (避難所の閉鎖：2011年10月7日)
 - 暮らしの再建：仮設住宅 17,482戸、42,485人 (2012年3月2日現在)

2. 岩手県の復興計画

— 8月11日に10年計画を作った —

25年まで … 「基盤復興期間」

28年まで … 「本格復興期間」

30年まで … 「更なる展開への連結期間」

- ◇ 復興の目指す姿
「いのちを守り 海と大地と共に生きる “ふるさと”と岩手・三陸の創造」
3つの原則：安全の確保、暮らしの再建、なりわいの再生。
- ◇ 対応ポイント：地域防災力の強化、自主防災組織の充実。
津波に対しては、安心感を持っていたが、守りきれない。避難の時間を稼ぐ対策とした。
- ◇ 各市町村が町村別の計画を策定する「まちづくりのグランドデザイン」のモデルを例示。
市町村で全体計画と地域別計画を作っている。
- ◇ 教訓：文化として継承していく。

3. 岩手県地域防災計画の見直し案の要点

(資料編「岩手県地域防災計画の主な見直しの内容」参照)

一 災害対応での課題 一

- ① 従前の津波被害想定及び防災対策では、今回の津波に対し対応が不十分であった。
- ② 従前の避難計画は津波に対し対応が不十分。避難者支援が充分に行きとどかなかった面がある。
- ③ 停電や省庁の被災により、通信手段が限定され、情報収集が困難だった。
- ④ 支援物資・備蓄・燃料：発災当初の物資不足(水、食料、毛布等)、極端な燃料不足。
- ⑤ 被災した市町村の行政機能の支援体制が整っていなかった。
- ⑥ その他：
 - ・ガレキが災害応急活動の実施に支障を及ぼした。
 - ・仮設住宅入居後のコミュニティ確立が難航した地域があった。
 - ・ボランティアの受け入れ態勢が早期に整わなかった。

4. 岩手県地域防災計画の主な見直しの内容

	主な見直しの内容	検証結果と防災対策への反映等抜粋
1.地震・津波の想定	○「多重防災型」の防災対策を講じる ○津波対策は2つのレベルの想定	○火災対策は？
2.避難計画・避難所支援等	○最大クラスを想定した避難計画の作成 ○徒歩避難の原則、及び自動車避難のルール化 ○避難場所等の見直し ○避難道路の選定等 ○避難支援従事者の安全の確保 ○社会福祉施設等の高台移転の促進 ○避難の長期化に応じた避難環境の整備 ○避難所の長期化に応じた避難所環境の整備 ○避難所管理運営体制の計画作成 ○避難所の物資ニーズの常時把握 ○乳幼児、高齢者、植物アレルギー者、女性等への配慮 ○災害文化の継承	○みんなで取り組む「防災活動促進条例」 - 防災は行政の役割と云う意識があり、備えや行動等に課題がある。県と県民の分担明確化 ○所在や生活情報等の把握、必要な情報の支援・サービスを容易かつ確実に受け取ることのできる体制の整備 ○避難場所等の見直し ○避難所運営管理マニュアル作成 ○在宅避難者の状況・ニーズ把握 ○コミュニティ維持等への配慮：自主防災組織の活動について整理 ○災害時要援護者への情報の伝達、避難の支援（高齢者、障害者、乳幼児、妊婦） ○追加：被害者名簿情報、生活関連情報 ○居住地外避難者への情報等提供 ○小学校への出前講座等 ○民間アパート等の受け入れ （警報はサイレン、詳細を放送）
3. 通信応報対策	○通信確保計画の策定：非常用電源、燃料、訓練 ○避難場所等における通信手段、非常用電源の配備等	○伝達手段の確保 ○HP・サーバーアクセス殺到対策
4.支援物資の備蓄・支援対策等	○食料・生活必需品等の備蓄の促進 ○緊急輸送体制の整備 ○陸上輸送の燃料の確保 ○避難所以外の避難者に対する支援	
5.被災した市町村の行政機能支援	（省略） ○遠隔の都府県等との相互応援協力	
6.その他	○仮設住宅入居者決定に係るコミュニティ維持等への配慮 ○仮設住宅に関する苦情相談窓口の設置 ○ボランティアの受け入れ態勢の整備	○避難指示（勧告）の伝達 ○指揮命令系統—消防と警察、市 ○植物アレルギー者等への対応 ○人名救助、救助活動連携（通信手段） ○踏切での遮断対応 ○身元確認作業等：歯科医師の協力 ○ボランティアの役割分担、CO要請

VII. 「被災地をめぐる」 報告会・討論会

記録：成松 洋



4月27日(金)と5月25日(金)の両日、「防災まちづくり談義の会」で東日本大震災1周年企画「被災地をめぐる」の報告会と討論会を実施した。

5月25日(金)「談義の会」では、伊東さんが撮影・編集したDVD記録映像を見て、ツアーに参加できなかったメンバーとの情報の共有を図った。

1. 荏本塾長

防災塾・だるまが企画し、多数が参加して、東日本大震災1周年企画「被災地を巡る」が実現した。みなさんが実際に行って・見て・復興に取り組むリーダーの方々と交流して学んだことの意義は大きい。

2. 経過 “皆さんの思いで実現!”

◇ 池田さん

…… (3ページ 参照)

3. ツアー行程と企画概要について

◇ 佐々木さん

…… (4ページ 参照)

4. 「被災地をめぐる」 幹事報告

◇ 佐々木さん

- ふるさと山田町からは、困難な中でも水産業は復興しつつあるとの知らせがきている。
- 山田湾の養殖事業も再開し、小口のオーナー制度で他地域のひとに支援と絆を募る新しい前向きな動きも出てきている。数年後には収穫した水産物が届く … ふるさとを支援していきたい。

◇ 山口(昭)さん

- 杉田劇場(磯子区民文化センター)での支援活動の縁で、気仙沼復興商店街の坂本さんをはじめ一面識もない方々にご協力頂き大変有意義な勉強会・交流会をおこなうことができた。商店街や気仙沼ほてい又宿泊にあたった旅館の方々の協力に感謝しています。また、「ふかひれスープ」を通じた気仙沼支援活動を続けていく中で横浜市民に支援継続の意義を再確認していきたい。
- 復興商店街が復興の起爆剤となることに期待したい。一方で、今後にはさまざまな困難もあると思う…見守っていきたい。この経験を横浜市民に直接お話しして頂く機会を作りたい。
- 被害が深刻な石巻・女川など今回まわれなかったのが残念。ぜひ次回に実現したい。

5. 活動報告

◇ 司会:中島さん

第1日目：報告者 田中晃さん ……(8ページ 参照)

第2日目：報告者 小原さん…<代理:成松さん> ……(12ページ 参照)

第3日目：報告者 鶴谷さん ……(15ページ 参照)

山田町交流会（3月14日）：報告者 片山さん…<代理:山田さん>

- ◆山田町交流会の最中に起きた“M6.8”の地震、津波注意報、そして避難勧告。
町の防災無線拡声器と、片山さん常備のラジオの地元FM放送で、“津波注意報に基づく避難勧告”を確認し、暗がりの中の道を町役場避難所へ向かった。
ほとんどの人が非常時の明かりを携帯しており、期せずして貴重な津波避難訓練となった。
- ◆復興計画の推進に必要なお金が回っていない、その背景にはたくさんの規制があるとのこと。
このまま時間が経過すると多くの人が破綻してしまいかねない切迫した状況であることを知った。

気仙沼交流会（3月15日）：報告者 添田さん…<代理:山口昭さん>

- ◆“ふかひれスープ”からの気仙沼の方々とのつながりで気仙沼訪問が実現し、避難所運営から復旧・復興へ、特に復興商店街立ち上げや被災した工場の復旧・復興などに奮闘してきたリーダーの方たちの示唆に富む話を直接聞く機会を得た。
- ◆住民の間では、自治会や地域の行事・活動などを通じて日頃から地域のきずなが培われていた。
紫会館への避難訓練も毎月行われていた。
- ◆避難所運営で大切なのは、避難した者の手で！ 皆で協力し合って！そして、コミュニケーションは復興の力！ …… 青年会が大きな役割を果たした。

6. 参加者レポート

◇ 司会:中島さん

(1) 小早川さん

- 全ての場所で被害が広範囲で甚大なのに驚いた。
- 山田町では、実際に津波警報による避難を経験して勉強になった。自分達の地域で何ができるか？ 問題点は多くあるが、今回視察したことを頭に置き、防災まちづくりに役立てたい。東日本大震災から学ぶ教訓を風化させてはならない。
- 次の訪問の機会には、仮設に住んでいる方々とお話する機会もぜひ設けたい。

(2) 長沼さん

- 山田町御蔵山^{おくらやま}では、大津波が来襲した“3時27分”を指したまま止まったJR陸中山田駅の大時計がモニュメントとして展示されていた。貴重な場所になると思う。
- 山田町交流会最中の津波警報での避難、津波予報は50センチでも馬鹿にせず、避難の大切さを実感するすばらしい訓練となった。避難勧告時にどこまで危機意識を感じたか、その大切さを感じた。
- 釜石の生徒たちによる「釜石の奇跡」、南三陸町防災対策庁舎の女子職員の責任感、気仙沼復興商店街・坂本青年会長の行動力と統率力などに感銘を受けた。ボランティア活動も続けたい。

(3) 山田(美)さん

- 我々すべてが復興に向けて貢献していかなければと感じた。次の機会には、仮設住宅の訪問や、「釜石の奇跡」で生徒が避難したルートを実際に歩いて体験することなども考えたい。
- 気仙沼等努力を重ねてやっと仮設商店街が設立された。日頃からの地域の人々の強い結びつきがあって、そして諦めないで汗をかいて頑張るリーダーがいて、力強い取り組みとなったと思う。交流会でたくさんのことを学んだ。東日本大震災の教訓をしっかりといろいろな方に伝えていきたいと思う。
- これから自分たちのまちの防災・減災に役立てるためには、3.11から学ぶ視点や具体的なポイントをしっかり意識し、また今回訪れた被災地についてもっと良く調べて、被災地の状況への理解を深めていくことが大切だと思った。

(4) 成松さん

- 東日本大震災から学ぶことが如何に多いかを実感した。同時に、まだまだわかっていないこと・学ばなくてはならないこともたくさんある。
- 交流会でリーダーの方たちの話を直接聞く機会を得て、気仙沼での青年会の果たした役割と貢献は特に印象的だった。山田町ではどうだったのだろうか。

(5) 山口(章)さん

- 防災は「まちづくり」「ひとづくり」です。被災地を巡って、そして交流会で、リーダーの役割を改めて実感しました。横浜の地域で進めている「安全・安心なまちづくり」に役立てていきたいと思う。
- 事前の減災対策、イメージングなどの図上訓練、自助・共助の大切さ等いろいろあるが、最も大切なことは、地域のみなさんに「自分もやらねば」と“気づき・理解”していただくこと。交流会では有意義な意見交換ができました。

(6) 伊東さん

- 被害の規模と広がり・・・日本全体で復興に立ち向かわないと無理だと思った。

- この大規模災害の中からも、町の青年部であったり商店街の仲間であったり立ち上がる人たちがいる。いざという時の「あきらめない心」が何より大切であることを学んだ。
- 被災地をめぐる体験が、自分たちが地域で防災に取り組む時に大きな力となる。地域の住人にもそれを伝えていきたい。

(7) 片山さん

- 気仙沼で青年会が果たした役割の大きさから大きな刺激を受けた。青年会は、自分たちの自治会としても取り組まなければならない課題。まずは若手・中堅層との懇親の場を設けることなどから取り上げていきたい。
- 気仙沼南町商店街の取り組みをリーダーの方々から直接聞くことができた。TV・新聞でも取り上げられていたが、それだけではわからない生の声を聞くことができた。

(8) 小原さん

- “釜石の奇跡”の生徒たちが長い長い道のりを避難した現場を訪れた。一方で、釜石東中学と鶴住居小学校がある一帯は依然ガレキの山で復興は進んでいない。教訓を生かすためにも、これでよいのか、と問わざるを得ない。
- 石巻には今回行けなかった。気仙沼でも被害の大きい地域でまわれなかったところがあり、残念。次の機会に実現したい。

(9) 高松さん

- 昨年4月以来何度も訪れている被災地だったが、変わっているようで変わっていない。昨年4月にガレキの山を見た時に受けたショックと比べて、今回の訪問で感じたのは、復興はまだ全然できていない状況だった。
- 更地となった名取の現場はまさに荒野、高台はないことが目に焼き付いた。
- 山田町での津波警報による避難の中で、全員がどこまで危機感をもって行動できたか、あらためて考えてみることも。

(10) 中島さん

- 被災地を訪れて、改めて、自然と調和して生きていかなければならないことを思った。今後の復興においても、いかにして＜生活基盤である経済と自然＞ ＜水産業復活と津波への安全性＞の調和を図るか、見失ってはならないテーマとなる。
- 津波の避難は難しい。夜間の避難は特に困難。津波による火災に対する心構えも。オオカミ少年を繰り返す懸念もある。危機感を大切にし、そして精度の高い津波情報と伝え方に今回の教訓を生かさなければならない。
- 学校での防災教育は、必要なことができていないのが実情。しかし、それを徹底的にやるしかない。

(11) 添田さん

- 気仙沼で一泊した翌朝、復興商店街へ向かった通りの左右には、流されてきたと思われる家屋が建物の間に挟まっていたり、商店内には廃材になったものが天井まで積み上げられていた。
- そうした光景に「もうダメだ、出て行くしかない、と皆が思った」との深い絶望が思われ、「この街で生まれ育って、この街が好きだからまたやるんだ」との言葉に、頷く街の方々の深い想いが伝わってくるような気がして、
- 『復興の底力を持つ街はそこに住む人たちが「この街が好きだ」と言える街、力を併せていく土壌を持った街なのだ』と強く感じさせられた気仙沼訪問でした。

7. 「被災地を見たこと、わかったこと」

◇ 上原さん

- 「被災地をめぐる」は、これからの防災を考える上で意義深かった。
大震災から1年後の被災地は、徐々に復興は進んでいるように見えたが、その歩みは非常にゆっくりであるようだ。特に町の高台移転の移転先確保は地形的にも難しい。
- 瓦礫処理はなかなかスムーズにいきそうもないと見えた。全国的な支援が必要だ。
- 漁業の回復は殊のほか早そうに見えたが、生活の基盤である町の復興が伴わないと定着しない。
町全体の復旧はかなり遅れそうな印象である。仮設商店街から復興への道のりには様々な困難があろう、見守っていきたい。
- 被災現場を忘れないように記念碑として将来に残す試みも、そうスナリとは行きそうにない。
- これからも企画を継続し今回訪ねたところを再訪していく。更に、今回立ち寄れなかった被災地（石巻、女川など）を重点に第2弾補充的ツアーも企画してほしい。

8. 討論会

◇ 司会:

片山さん・山田(美)さん



「被災地をめぐる」をふりかえって、2つのグループに分かれて討論会を実施した。

＜Aグループ＞ テーマ:「東北地方の復興について」

◆最大の論点のひとつに「高台移転」の問題がある。国の方針や地域への権限付与がどうなるのかという観点とともに、被災地サイドで住民と行政をまとめて調整できるコーディネーター・キーパーソンがいるかどうか大きなカギと言える。

＜Bグループ＞ テーマ:「山田町・気仙沼との継続的な関わりについて」

◆ボランティア活動や被災地の物産販売などの支援が続く一方、被災地の状況も問題も変化してきている。被災地のひとたちとのつながりを大切に、被災地のことを継続的に知る努力がこれからもさらに大切となる。

＜全体討議＞

◆今日の全ての論議が復興のグランドデザインの問題に行きつく。今後とも被災地との結びつきから学ぶものは大きいと思う。7月29日(日)に予定している7周年記念企画(パネル)のテーマにもつながる討論となった。

～報告会・討論会の感想～

被災した地域の多くで、もともと人口は減少傾向で、産業面でも厳しい状況にあった。そんなところに東日本大震災で被災し、被害は大きく、復興は厳しい状況にある。日本全体の支援がまさに必要！
防災塾・だるまの今回のような活動を繰り返して、同じ場所(定点)を見続けることが大切だと思います。

(土木学会・防災塾だるま会員 山本さん)

VIII. 東日本大震災から1年 被災地をめぐる

点と線： 百間は一見に

・・・ 池田邦昭

被災から1年を過ぎた3月14日～16日、北は岩手県普代村から 南は宮城県名取・岩沼まで、被災した市町村を「防災塾・だるま」会員の皆さんと2泊3日で訪れました。

北山崎のような景勝地がつづいたりヤス式海岸線は、どこも大きな被害を受け、見る影もない姿が次々と続きました。それでも、私たちが訪れたのは岩手県と宮城県の2県であり、福島県が入っていないことを考えると2/3しか訪れていません。

少々広げて被災県を青森県・岩手県・宮城県・福島県・茨城県・千葉県と考えると、1/3しか訪れていません。それも海岸線しか見ていません。内陸部や避難所なども訪れていません。

2泊3日 数百キロ と、多くを見てきたような気がしますが、実はほんの一部しか見ていないのかもしれない。それでも「百間は一見に・・・」

まだ訪れていない人は、ぜひ被災地を訪れてください。

平成24年1月17日、だるまの塾長他の皆さんと神戸市を訪れました。

阪神淡路大震災から17年、復旧・復興した町は何事もなかったように見えました。

しかし、17年目の1月17日早朝、神戸市役所の隣の公園には、押し黙った市民が次々と集まり続けていました。

今年は、東日本大震災の被災者を加え、例年になく参加者が多いように感じました。

神戸市民にとっては、17年前の姿が重なり、他人事とは思えなかったのではないのでしょうか。

私は直接被災してはいませんが、可能な限り継続して見守り続けることが、ささやかな支援と共に、何かを知る大切な機会ではないかと思います。東北の人たちへ様々な形で関心を持ち続け、継続することが大切ではないのでしょうか。

避難所運営で大切に思ったこと(神戸の先生より)

“明るい笑顔” “元気なあいさつ”